

県中教研 音楽部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 佐藤 真
題 字 金山 泰仁 先生

音楽科の授業における「知識」とは？

指導主事 池田 宗介

中学校音楽科の「知識及び技能」に関する目標の一文に、「曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解する」ことが掲げられています。これについて『中学校学習指導要領解説音楽編』には、「その音楽固有の雰囲気や表情、味わいなどを感じ取りながら、自己のイメージや感情と音楽の構造や背景などとの関わりを捉え、理解することである。したがって、単に教材となる曲の形式などを覚えたり、曲が生まれた背景に関するエピソードなどを知ったりするのみでは、理解したことにはならないことに留意する必要がある。」と記されています。音楽科における「知識」の習得に当たっては、「実感を伴いながら理解」することと、「自己との関わりの中で理解」できるようにすることの2点が重要です。

例えば、記号「フェルマータ」の意味について、教科書には「ほどよくのばす」と記載されていますが、「ほどよくのばす」とはどれくらいのばすことなのか、教材曲を歌ったり演奏したりする過程を通して、実感を伴って理解できるようにすることが大切です。記号の名称や意味を、筆記テストで答えることができただけでは、学習指導要領が求めている「知識」を習得した姿とは言えません。

教材曲について、「前半は弦楽器の音色が中心で落ち着いた感じがするけれど、後半は金管楽器が出てきて華やかな感じになる」と捉えた生徒がいたとします。この生徒は、「音色」を知覚し、「音色」の働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えています。また、「前半は弦楽器が中心で、後半は金管楽器が出てくる」ことを指摘しているので、「音楽の構造」が理解できています。このように、「自己のイメージや感情と音楽の構造や背景などとの関わりを捉え、理解」している生徒の姿を目指す必要があります。

(西部教育事務所)

音楽科教育の役割を自問すると…

部長 佐藤 真

ある音楽教育学者の言葉にこのような記述があります。「音楽の知識や技術は樹でいえば枝であって、幹ではない。」と。また、「音楽の学習が本当に子供の心を惹く活動であったら、強制されなくても、その活動は学校の外で自然に行われるようになるだろう。それは、子供の心の中に他から強いられたものではない本当の目的意識が喚起されたしるしである。」とも述べています。さらに年月を遡ること数十年前にも、作曲家の芥川也寸志氏が「音楽教師諸氏は音楽を教えようとするあまり、音楽から学ぶことを忘れてはいないか。」と指摘しています。当時はまだ、知識や技能偏重の傾向にあり、音楽訓練的な指導が現場では見られたにせよ、現在の音楽科教育に携わる者にとって、どちらの言葉も「音楽科教育とは何か」の本質を示唆している言葉のように思われます。

令和4年度の音楽部会研究主題に「生活や社会の中の音や音楽」という言葉が、さらに副題には「主体的・対話的で深い学び」が明記されました。これまでも、意識しながら継続して取り組んできた視点ですが、あえて明記されたことで、「音楽科教育はどうあるべきか、また何のために必要なのか。」を、改めて問い直し、自分の授業改善に結び付けるよい機会になるのではないのでしょうか。

前述の教育学者は、「音楽の教育では感性を教えることはできない。指導者がどんなに力んでも子供の心の中に取り込もうとする気持ちが働かなければ授業として成立しないのである。」とも言っています。つまり、私たちの役割は音楽科教育を通して、子供たちが豊かな感性や情操を身に付けるための道筋をいかに付けるかということになるのでしょうか。そして、音楽科教育を通して味わった感情や様々な感動が豊かな見方、感じ方を生み出す心の経験となって、その後の人生を豊かに彩る一助になればと思います。

(富・城山中)

第65回 研究大会報告

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、
音楽文化と豊かにかかわる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。
— 育成を目指す資質・能力を明確にした指導計画と指導に生かす評価 —

東 部 地 区

(富・岩瀬中)

碓井絵美教諭が「混声合唱での声部の役割や曲の構成を理解して、合唱表現を工夫しよう」という題材で、混声三部合唱「時の旅人」を教材として2年生で授業を行った。曲にふさわしい音楽表現となるよう、声部の役割と発声、言葉の発音等の技能との関係を意識しながら合唱表現を工夫するという内容であった。

まず、電子黒板やジャムボードを活用して、前時までに考えた曲のイメージや、自分たちの思いを伝えるための歌い方を確認した。楽譜や歌詞を大きく示したことは、生徒間で出た意見や情報を全体で共有し、思考を深めるために効果的であった。また、表現を深めるために教師が発声や発音の技術指導をしたり、歌詞のイメージを明確にするために生徒に音読や身体表現の活動をさせたりしたことで、生徒は様々な表現の仕方を試しながら、よりよい表現の仕方を追究することができた。また、教師が生徒の発言を基に、繰り返し歌い込ませることで表現力が高まっていく様子が見られた。言語活動と歌唱活動のバランスがよい授業となっていた。

授業後の部会協議では、本時のねらいに迫るための手立てや評価の方法等について、活発な意見交換が行われた。海見英理指導主事からは、ICTの活用法や「技能」の評価の仕方についての注意点の他、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためには、生徒の変容や粘り強さ、調整力を見取るための継続した記録が重要であることを教えていただいた。また、新学習指導要領の全面実



施を踏まえ、学習指導案の作成のポイントを教えていただき、指導と評価の計画の考え方について具体的に知ることができた。

島 香織 (黒・明峰中)

西 部 地 区

(射・新湊南部中)

浦島みつる教諭が「曲のよさを批評文で紹介しよう」という題材で、「組曲『展覧会の絵』」を教材として3年生で授業を行った。授業には、同校のICT指導員も同席し、様々な場面でICTの活用が見られた。まず導入時にプレゼンテーションソフトで前時の学習内容を振り返り、要点を押さえた。これは、生徒にとって週1時間しかない細切れの学習の記憶を、瞬時に想起させる上で効率的であった。その後、紹介したい曲が同じ生徒同士でグループになり、曲のよさを互いに伝え合う活動では、生徒たちがタブレット内の音源を各グループにあるスピーカーから流して聴いたり、話し合ったことをタブレットにメモをしたりするなど、ICT機器を使いこなす姿が見られた。さらに、音楽から知覚したことと感受したことをグループ内で協議し整理していく活動では、どのグループの生徒も「もう一回聴きたい」と思ったところを「個別に」「何度も繰り返して」聴いていた。他者との協議で新たなことに気づき、それを音で確認する活動を繰り返すことにより、生徒たちは、より主体的に、より深く音楽の特徴を理解することができた様子だった。

部会協議①では、射水市の他校での同題材での異なるICTを活用した実践が紹介された。

部会協議②では池田宗介指導主事より、学習指導要領の内容を踏まえ、鑑賞領域における批評文を書く活動について解説していただいた。また、小学校の音楽科の授業におけるICTソフトの活用例の紹介もしていただいた。

指導助言の最後に、これまで重要視されていた「場の設定・学習形態の工夫(しかけ)」に加え、身に付けさせたい資質・能力の育成のために「音楽の『何』に気付かせるために『どのような発問や働きかけ』をするか(駆け引き)」に重きを置いた指導の必要性について例えを交えながら分かりやすく解説していただいた。

番匠 理美 (氷・西の杜学園)

東海北陸音楽教育研究大会 福井大会(オンライン)に参加して

第1学年 創作 「声によるアンサンブル曲をつくろう」 芝 幸弘 教諭 (鯖江市中央中)

小林一茶の俳句「やせ蛙 負けるな一茶 ここにあり」を素材に、「言葉の抑揚を意識する」「ユニゾンと多声的な重なりを取り入れる」「俳句の言葉を全部使用する」の作曲条件のもと、小グループで創作活動をするという内容だった。生徒たちは創ったものを何度も試したり比べたりすることで、拍子感や曲の構成の効果を感じ取っているようだった。生徒たちの活動中には、「拍子がある方が創りやすい」や「同じ言葉の反復は4の倍数にするとよい感じだ」、「曲の終わりは全員のリズムをそろえると気持ちがよい」などの気付きが生まれており、主体的で深い音楽的な学びにつながっていると感じた。終末では、学習の振り返りの場として、互いのグループの発表を聴き合い、工夫点を見付けて伝え合う活動が行われた。聴き手に自分たちの表現の工夫が伝わったことを実感した生徒たちのうれしそうな顔が印象的だった。

柳原 薫 (小・蟹谷中)

第3学年 鑑賞 「スメタナが託したメッセージを読み解こう」 龍勝 芳江 教諭 (福井市明倫中)

音楽が、人々との暮らしや思い等と密接に結び付いていることを、音楽の特徴と関連させながら感じ取って楽曲を深く味わうという内容であった。小グループに分かれた生徒たちは、何度も繰り返し音楽を聴いたり、音楽に合わせて身体表現をしたりして音楽の特徴を捉えようとしていた。全グループの活動の様子を視聴したが、楽譜からリズムの細かさや強弱の変化、スタッカート等の音楽の特徴に気付くグループ、スキップのような身体表現を取り入れることでリズムに込められた作曲者の思いを感じ取った様子やグループ等、多様な活動を通して、音楽を深く理解しようとする姿が見られた。生徒が変容していく様子から、協働的な学びの重要性を再確認することができた。

米多 彩 (滑・滑川中)

富山県音楽教育研究会 講習会に参加して

講習会はⅠ～Ⅲに分けて実施された。

長野県教育委員会の臼井 学先生による講習Ⅰ「歌唱分野の指導について」では、全ての児童生徒が学ぶ「音楽科」、必修修教科「芸術科」の科目「音楽」という視点で、各校種の新学習指導要領の比較から分かることを解説していただいた。その中で、学年間や校種間の連続性や系統性を踏まえ、共通していることや異なることに着目し、生徒にどのような力を付けさせたいのかを明確にすることが大切であると教えていただいた。

国立音楽大学の津田正之先生による講習Ⅱ「器楽の指導について」では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためのポイントを以下の3つ教えていただいた。

- ①学習の見通しをもてるようにする。
- ②次の学習に生かせるように丁寧な振り返りをさせる。
- ③ねらいとズレが生じている生徒に対して、友達の学習状況のよい点に気付かせるなどして、自らの学習の調整を図るようにする。

筑波大学附属小学校の高倉弘光先生による講習Ⅲ「学習者がワクワクする鑑賞授業とは」では、「ソーラン節」や「さくらさくら変奏曲」の授業実践例を基に、楽しく聴かせる授業展開の方法について教えていただいた。

- ①「合いの手を聴きましょう」と教師が鑑賞のポイントを伝え、聴かせる。
- ②「指揮をしながら聴きましょう」など体を動かしながら鑑賞させ、生徒の気付きを生む。
- ③「どこの国の音楽？」など何か発問してから聴かせ、生徒に考えさせながら聴かせる。
- ④いきなり聴かせ、生徒との対話の中でねらいに迫っていく。

以上の4通りを提示していただいた。いずれの場合も、ねらいを明確にした指導が大切であることが分かった。

令和5年度には、全日本音楽教育研究会全国大会が富山で開催される。これを機に、より一層研鑽を積んでいきたい。

廣本 浩太 (砺・般若中)

フレッシュさんから

「音楽好き」を増やす授業を目指して

富山市立速星中学校 白澤菜々子

私は小さい頃から音楽が好きだった。その背景には小学校で私に音楽を教えてくださいました先生の、丁寧で心の込もった授業の存在がある。

中学校の生徒は評定を意識するあまり、音楽を心から楽しむことができていないのではないかと感じる。音楽は私たちの生活を豊かにするのに必要不可欠なものであり、誰にとっても楽しいものであってほしい。

そのような思いから、授業をする際には、言葉選びや話し方を工夫したり、生徒の努力をたくさん褒めたりすることを心掛けています。先生が私にそうして下さったように、生徒を大切に思いながら、音楽の楽しさを伝えていきたい。

一年を振り返って

入善町立入善西中学校 田村 諭士

新規採用教員として勤務が始まり、一年が経とうとしている。部活動や学級事務に日々追われる中、授業の難しさを改めて感じた一年だった。

歌唱活動では、意欲的に取り組む生徒がいる一方で、周りの生徒の反応が気になって歌うことをためらう生徒もいる。そんなときは、周りの先生方に助けていただきながら、生徒と一緒に練習するなどして、恥ずかしがらずに歌える雰囲気づくりに努めた。

これからも、楽しく学べる授業の雰囲気づくりを目指すとともに、多くの生徒に目で見ることのできない音楽のよさや美しさを味わってもらえるように、教材研究を重ねるなど研鑽をしていきたい。

音楽科だからできること

射水市立大門中学校 渡邊 妃菜

教員になって一年。悪戦苦闘の毎日だ。昨年行われた合唱コンクールは、選曲、歌唱指導の難しさ等、未熟な私にとって困難を極めた。また、コンクールを単に勝ち負けの場にするのではなく、指導を進める中で、その過程の意義や目的を感じられるようにする必要性を痛感した。

そして、歌声を育てながら、音楽科だからこそできる人とのつながりや人間力を培っていきたいと感じた。日常生活には音楽があふれている。そんな身近にあるたくさんの音楽を生徒と共に楽しみながら、その魅力の一つでも多くに伝えられるように、日々研鑽を積み重ねていきたい。

音楽を通して

射水市立射北中学校 水戸真美子

4月からあつという間に時間が過ぎていった。音楽科の教員として、合唱コンクールが無事に終わり、本当にほっとしている。当日は、生徒たちが普段見せない表情や真剣な姿、本番ならではの歌声と、気持ちのこもった「直球のパワー」に圧倒され、胸が熱くなった。生徒に主体的に授業に取り組ませるためにはどうしたらよいかということについて、日々悩んでいるが、この合唱コンクールに取り組む生徒の姿を見て、少し分かったような気がしている。

「音楽が楽しい」生徒たちに心からそう感じてもらえるように、私も一緒に学び、前進していきたい。

合唱コンクールを終えて

高岡市立芳野中学校 鷹田 わこ

音楽教諭として採用されて一年が経った。まだまだ勉強不足だと感じる毎日だ。多くの行事がある中でも、合唱コンクールは本当に印象に残るものとなった。

本校の音楽教諭は大ベテランの先生と私の2名で、互いに各学年の授業を半分ずつ担当している。勉強になることもある反面、合唱コンクールでは指導力の差を感じ、「私を受けもつクラスはかわいそうだ」と自己嫌悪に陥っていた。しかし、「頑張るしかない!」と、本に書いてあることを実践したり、先輩の先生方にアドバイスをいただいたりして、なんとかやり切った。新たな学びが多くあり、成長することができた。生徒たちの「もっと上手になりたい」という熱い気持ちに応えられるよう、もっと勉強していきたいと感じた。